

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 釜田 友里江

論文題目 日本語会話における共感の仕組み
— 自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相 —

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	杉村泰
委 員	名古屋大学教授	玉岡賀津雄
委 員	名古屋大学准教授	鷺見幸美

本論文は日本語会話の「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りにおける共感の仕組みを明らかにすることを目的としたものである。これらの語りにおいて、語り手と聞き手は単に事実の伝達をするだけでなく、語り手は聞き手に何らかの反応を期待し、聞き手は語り手の期待を汲み取って何らかの反応をする。この時、語り手の期待通りに聞き手が反応すれば円満な会話のやり取りになるが、実際には意図的または非意図的に語り手の期待とは異なる反応を聞き手がする場合もある。例えば「自慢」を語る場合、語り手は聞き手に褒めてもらいたい、賞賛してもらいたいと考える一方で、傲慢な人だと思われるのではないかというジレンマが生じる。一方、聞き手は語り手の「自慢」に対して賞賛したいと考える一方で、相手の「自慢」を心地良く思わない場合に賞賛したくないというジレンマが生じる。あるいはその語りが自慢なのか単なる事実報告なのかで、語り手と聞き手の認識にズレが生じる場合もある。このような中で、語り手も聞き手も態度のすり合わせによって相手に合わせようと共感しようとする。本論文はこのような共感の仕組みについて論じている。以下、本論文の概要と評価について述べる。

[本論文の概要]

本論文は、序論の章と結論の章を含め、全部で6章からなる。

「第1章 序論」では、会話には「事実報告」と「経験報告」の区別があることを指摘し、上述の研究の目的を示している。「事実報告」とは「今日の会議は3時です」「了解しました」のような会話で、聞き手は話し手に事実を受信したことを伝えることが期待されるものである。これに対し、「経験報告」は「昨日彼に振られたの」「それは辛いね」のように、事実の伝達に感情の伝達が伴うもので、聞き手には語り手の気持ちを汲み取った反応が期待される。例えば、「自慢」の場合は賞賛してほしい、「悩み」の場合は解決策を提示してほしい、「不満」の場合は自らの正当性を認めほしい、「愚痴」の場合は同調してほしい、「自己卑下」の場合は肯定・否定してほしいという語り手の期待がある。同時にこれらの経験談を聞いて、聞き手は語り手がどのような意図を持って語っているのかを汲み取って、それに応えることが求められる。このような「語り手の期待と聞き手の反応」という観点から共感発話の連鎖を分析することを述べている。

「第2章 先行研究」では、まず先行研究における「共感」の定義を概観し、次に「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りに関する先行研究を概観している。先行研究では「共感」について「相手の心を知るための積極的な働きかけ」などと定義されている。しかし、これだけでは語り手の期待に聞き手の寄り添おうとする態度が抜け落ちてしまっている。そのため、本研究では共感を「相手の考えや気持ちを理解して、相手の期待に添おうとする態度」と定義している。また、「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りに関する先行研究では、それぞれの語りの特徴が指摘されているが、5つの語りの関連性は示されていない。そこで本研究では、5つの語りの類似点と相違点について言及し、相互の関連についても分析することを主張している。

「第3章 調査の概要」では、本研究の調査の概要を述べている。本研究では4つの大学の学部1年生（日本語母語話者）を調査対象者とし、2人ペアで15分間自由に会話をしてもらい、その会話をICレコーダーで録音し、西坂（2008）で提案されているトランスクリプションの記号を使って文字起こししている。この中から「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りの部分を抽出し、分析の資料としている。

「第4章 共感発話の連鎖」では、「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りを語り手Aと聞き手Bの発話連鎖の観点から分析し、共感発話の連鎖パターンの特徴について論じている。まず「自慢」について分析している。本研究でいう「自慢」とは、Aが自らのことや自分に関係のあることを他人に誇ることで聞き手Bから賞賛されることを期待している場合を指す。こ

パターン1：Aの「自慢」に対してBが賞賛を示し、Aが更に「自慢」を語る場合。

パターン2：Aの「自慢」に対してBが賞賛を示し、「自慢」が収束へ向かう場合。

パターン3：Aの「自慢」に対してBが賞賛を示しているが、語り手の期待するような反応を十分に示しておらず、「自慢」が収束へ向かう場合。

パターン1ではAの「自慢」に対してBが賞賛を示すことでAが自慢し易い機会を作り出している。パターン2はパターン1の後に現れており、Aの「自慢」に対してBが賞賛を示すことでAの期待に応えている。パターン1とは逆にパターン3は、Aの「自慢」に対してBが賞賛を示した後、Bによって話題が変えられている。

次に「悩み」について分析している。本研究でいう「悩み」とは、AがBから解決策が得られることを期待している場合を指す。この場合、Aの「悩み」に対してBが解決策を提示する場合もあれば、Bは解決策を提示しない場合もある。このうち本研究の調査から抽出されたのは次の2つのパターンである。

パターン1：Aの「悩み」に対してBが解決策を提案し、「悩み」が収束していく場合。

パターン2：Aの「悩み」に対してBが解決策の提示はせず、Aの心情に賛同することで「悩み」が収束へ向かう場合。

パターン1ではAの「悩み」に対してBは単に期待された解決策を提案するのではなく、Aを励ますかたちで反応し、Aも納得している。パターン2ではAの「悩み」に対してBがAの選択は正しいと認める反応を示し、Aも納得している。本研究では、パターン1を「提案タイプ」、パターン2を「後押しタイプ」と呼んでいる。

次に「不満」について分析している。本研究でいう「不満」とは、Aの正当性がBに認められることを期待している場合を指す。この場合、Aの「不満」に対してBが正当性を認める場合もあれば、Aの正当性をBが認めない場合もある。このうち本研究の調査から抽出されたのは次の2つのパターンである。

パターン1：Aの「不満」に対してBがAの正当性を認める反応を示し、「不満」が収束へ向かう場合。

パターン2：Aの「不満」に対してBがAの正当性を認めてはいないが、Aの心情に理解を示し「不満」が収束へ向かう場合。

パターン1ではAの「不満」に対してBが正当性を認めるとAは納得し、それ以上「不満」を語ることをしていない。パターン2ではAの「不満」に対してBは正当性を認めることができないが、Aの心境に賛同を示したり、Aにとってプラスになる評価を行ったりすることにより、AはBの反応を受け入れ、納得する反応を示している。

次に「愚痴」について分析している。本研究でいう「愚痴」とは、Aが望ましくない事態や立場であることに同調してもらえることを期待している場合を指す。この場合、Aの「愚痴」にBが同調する場合もあれば、同調しない場合もある。このうち本研究の調査から抽出されたのは次の3つのパターンである。

パターン1: Aの「愚痴」に対してBが同調し、「愚痴」が収束へ向かう場合。
 パターン2: Aの「愚痴」に対してBが同調し、Aが更に「愚痴」を語る場合。
 パターン3: Aの「愚痴」に対してBが同調し、Aが「愚痴」をやり直す場合。

パターン1ではAの「愚痴」に対してBが同調することで「愚痴」が収束へ向かっているが、パターン2ではAの「愚痴」に対してBはAが述べた発話を繰り返したり、言い換えたりすることで更にAが「愚痴」を語るきっかけをBが作っている。パターン3ではAの「愚痴」に対してBが過剰に同調し、AとBの間で認識のズレが生じている。このような場合にAは「愚痴」をやり直す傾向がみられた。

最後に「自己卑下」について分析している。本研究でいう「自己卑下」とは、Aが自分の能力や経験が劣っていることを伝えることでBに否定または肯定されることを期待している場合を指す。「自己卑下」の場合はAがBに期待する反応として否定・肯定の2つが考えられる。このうち本研究の調査から抽出されたのは次の3つのパターンである。

パターン1: Aの「自己卑下」に対してBが否定をし、「自己卑下」が収束へ向かう場合。
 パターン2: Aの「自己卑下」に対してBが肯定し、「自己卑下」が収束に向かう場合。
 パターン3: Aの「自己卑下」に対してBが否定し、Aが「自己卑下」をやり直す場合。

パターン1ではBはAの賞賛できる部分を取り出して励ましている。パターン2ではAの能力を否定することを避けて、Aの心情に同調する態度がみられる。パターン3ではAはBに「自己卑下」が肯定されることを期待しているが、Bは「自己卑下」を否定して、AがBに抵抗を示している。ここでBはAが期待する反応を示したいと考える一方で、Aの能力を否定することを回避して反応を示さなければならないというジレンマがある。以上、第4章では、5つの語りの共感発話の連鎖パターンを明らかにしている。

「第5章 共感発話における態度のすり合わせ」では、第4章で明らかになった5つの語りの共感発話の連鎖パターンを「態度のすり合わせ」の観点から分析している。その結果、「自慢」の回避、「悩み」の軽減、「不満」の緩和、「愚痴」から「自己卑下」へのすり替え、「自己卑下」の再カテゴリー化などの現象について説得力のある説明をしている。

「第6章 結論」では、本研究の分析結果をまとめ、AはBに認められたいという欲求、BはAを認めたいという欲求があり、互いに調整を行いながら態度をすり合わせていくことで共感が創り上げられていることを指摘している。その上で「共感は自分の欲求を満たそうとするだけでなく、相手の欲求も満たそうとする複雑な営みである。複雑な営みでありながらも、人間関係の構築や維持を行う上で欠かすことのできない営みであることを語り手と聞き手の発話連鎖から示すことができた」と主張するとともに、残された課題について論じている。

[本論文の評価]

本論文は日本語会話の「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りにおける共感の仕組みについて分析したもので、話し手と聞き手の認識のズレやジレンマを抱えながら、いかに「態度のすり合わせ」をして会話を成立させているかを明らかにした優れた論文である。とりわけ、以下の各点において審査委員から高く評価された。

- 1) 研究のデザインが綿密で、極めて論理的に論証されている。
- 2) 先行研究について十分な検討が加えられ、これまでの研究の成果と問題点を明確に指摘したう

別紙 1 - 2

えで、研究史上意義のある研究課題が提示されている。

- 3) 仮説検証型のアプローチをとることにより、データに出現した発話連鎖だけでなく、データに出現しなかった発話連鎖も分析対象にすることができ、その発話連鎖が見られなかった理由が考察されている。
- 4) A、B 二人の会話において、A は B に認められたいという欲求があり、B も A を認めたいという欲求があり、互いに調整を行いながら態度をすり合わせていくことで共感が創り上げられている様子が明らかにされている。
- 5) 「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の 5 つの語りの発話連鎖のパターンを明らかにするとともに、5 つの語りの相互関連や話題の転換の仕組みについても詳細な分析がなされている。

一方、審査員から以下のようなコメントもあった。

- 1) 本研究の分析はグライスの協調の原理（質・量・関連性・様態の公理）を満たした状況下での理想的なコミュニケーションを前提としたものであることを述べておいた方がよい。
- 2) 今回調査したのは学生同士の軽い雑談の場面であったため、鼻に付くような「自慢」や深刻な「悩み」などは見られなかったと思われる。二人のパーソナリティや人間関係、場面設定をさらに考慮した調査をすれば、発話連鎖の仕組みがより明確なものになると思われる。
- 3) 「事実報告」と「経験報告」の区別が単純化されているが、その相互関連について踏み込んだ分析が必要である。
- 4) 本研究における「同意」と「共感」の違いは分かるが、「同意」と「同調」の違いは不明確なので、この点をさらに考えた方が共感の仕組みをより明確に分析できると思われる。

このように本論文には、不十分と思われる個所も見られる。しかし、本研究で行った研究は先行研究の指摘を十分に超えるものであり、日本語会話研究において重要な位置を占めるものである。全体的に見た場合、本論文は論旨が整然としていて、完成度の高い優れた論文である。

以上の評価に基づき、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。